大川仁政録第三輯　五

へ13
3348
15

へ 13
大 3348
志 15

近世義談 大川仁政録第三輯巻之五

松亭主人編次

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

第十回

被羈再生恩義語往事
旅客好酒陶毒手落命

人各望あり大人君子とりわけ望きくんぐ有べうぐ只其望所異なるのみ大きち色下小人ふ於てい或い身をきんをを望む者あり又い黄金を貯んをを望む者あり藝道ふ抽んをを望む者あり賢不肖老若男女望るきとりのあらぐ其望所より取入て敬く時い欺うく者こさわぐ於富い藤八ぐ爲ふ欺うれて身をまうせ又復身を誤ちとり此於富ゲ藤八ふ物語りし望をとりまん

父母の敵と討度のぞみなり其子細ありて抑京都二条辺に
太る宮家の侍なれど木辻右門と云る者あり子無して其妻一子と祈
不美目よき女子を設んとて思ひて洛東玉章寺に俗呼て小町
寺とも是なる千束地蔵尊に霊験炳然一世是に祈たりと
みて一女子をうむ夫婦悦んで行末富貴なるべしと名を富と號
育し不成人に従ひて其美艶なること唐土の楊貴妃
我朝の衣通姫なんどゝも兵是に勝るべしと人もひ両親も思
ひて頃て貴人高位に嫁せしめ早く光栄に世を経るんと
思へば香茶の湯生花和哥の道なども云に及ばず文学も学べ
学び已糸竹の色に別て器用あて何くとなく誉古させもの

心に誇りて寵愛浅からず然る不見頃赤松瀧祐将軍義教公
と共に奉り其身も誅せられしかの兵何とやら都騒がしく公々殿上
人抔も諸侯に縁を求て遠近の国々へ離散し扶助せらるゝ
も有しに右門思ふ様我娘も今年は十七にもなりぬれば能
聟をも撰んと思へ共我家へ聟を取ては彼が出世ふちらん
又我々が業花をあさん事も叶ひ難し娘が艶色世にすぐれ
る高貴の家にも彼方より調度金と云物を取て嫁に乞んなども妻
なるべしとかねて都に近頃物騒しかの家々も穏やに繁
倉に諸国の諸侯参勤して今治平にて繁花なりと聞く其上
我実父に縁金の商人なり若き時都に登りて我母と家に住

時密ふ私通て我と産セしを聞く其後鎌倉ふくり玉ひ
我母離別なりしより我を伴ひて此木辻の家へ嫁しし故
通路い絶てもぐれ兵父い先年死去て我腹妻りの者有て跡を
相續し福有ふ暮すと聞く実又病死の節一度音信也し
のみなれども実の兄弟のなれい是へ向けて鎌倉へ参り仕度
なりとも町家ふ住居なり共して娘と大諸侯へ奉公ふ出す兵
縁付致さきともなるべ今の宮仕ふ勝るるも有らめと思案
し妻ふもさり商ひなりふ妻も亀も角も扨よりんと思ひ
玉ひ者の計ひ玉へこのよりり娘ふも言きを幸望りの有ん
木辻の跡目い金子と取て養子と家財を譲り道具諸色の物

を賣拂ひて黄金と成し是と所持し少々の荷物と僕ふり妻
子を同乗し都と發足して鎌倉ふ参り頃も秋の事ふ
成しかば東海道と行い道法も近く道中もよろんど所々ふ大河ふ
ありて今年い雨も多々ふ川止ありとなく乗ふ中へ少しく遠く共急く
旅ふしもあらぬれば中仙道と行べしと思案して木曾路を越て
出ようふ此右門夫婦とも酒と好て常々大酒うしば道中ふて
道々酒と呑居る故乗ふ間取て路ふ行ず漸一日ふ六七里のたしと行ば今
なる車ふ乗ば十日余り日ふすを経て浦妻籠の宿近来りさり娘へ乗ふ中
乗ふ酒と過し玉ひしふ夜の乗りやせん旅の中ハ些心して慎玉へと又
共聞ず二人して矢張路々呑居る故荷と持し下部も同く酒と呑居る事ふ

お富人心を痛め居り為不信及飯田不知り者有是へ寄行しと是ち
飯田迄何程有やと問ふに八里〻と云然ば今宵は是一宿を明日
飯田へ行べしと其日い妻籠に宿を取休みしに又例のごとく両
人共酒を呑て臥しに故翌日も朝埒あず日も出ずして起ぬで
夫より朝飯を食し彼是とて出しに故五ツ前頃に妻籠を
立出信及へかりそ廣瀬と云る所迄来りしに家早四ツ過なり
爰にても又酒とのこ彼是手間取り昼前にもなりしに昼飯と
食べ此所にて順道と聞に大平と云る迄三里の所木曽峠を此
方より二里昇り又一里下る雑所なりとの故駕二挺雇ひ行に先
へ檜山にて大石杯道に横たり居て上り下りに道にて如何

ふも雑所なり難に向ふより駕一挺来りて此方の駕屋と何や
ら應對に此駕と乗替て去りぬと云ひて駕を替たり於富を
此駕に乗せ行に駕屋い道の事故早〻右門い歩行
にて老人の事にて道埒あず淵大平迄迄行〻
廣瀬にて雇ひ来し駕屋い向ひて帰り来り右門に如此〻
の所に両人とも待居る由を聞に依て急ぎ其処迄行に両人共
先刻此所にて来り右門に来ると待居り夫にて先少〻休足
す〻家早何時なりんと云に於富ぞ乗来りし駕屋い未だ是に
居りと云ぞ八ツ半なりと云に飯田にて如何程あるやと問に三里
あると云に共今より行ば日暮に人に着なり飯田迄下直にて行

べーとゝ云ふ右門思ふに此辺に宿屋も見えぬ又宿と取るも余り早し飯田迄行へーと思ひ然らば飯田迄頼むべー今一掉駕い出来まはじとやと云ふ此辺の人足い皆百姓や人今出来秋ゑ野へ出と小ば出來ばしとゝふ妻い今まで駕ゑ来り大多足も休まらぬ娘のく爽やそ妻い共へ行ゑ行べーとの故等んゑ急ぎそ行んと於富一人駕ふのと其処を立出行ふ又峠ゑ其雖処なり駕ふもく急しと思ひ急ぎ行ふ一里計りも来うんと思ふ頃右門ゞ妻い足を痛め今い一足も歩行兼ゝ右門も其以前より急ぎゑ故大分労きゝり其上寂早刻限い入相頃なり是ゑ迄も飯田迄い行急じ此辺ゑて今宵い宿と借べき宅い有間敷ゑとの事駕屋

此辺い宿場ふ有ざれば宿屋い百姓家ゑて旅人と泊るい法度故頼とても泊る所いなー太石今十二三町も行ゑ我ふ懇意なる者あり是へ行て我ふ頼ゑ進らすべーとの事然らば何分頼むなりと云て漸のゑて十二三町も行ゑふ山を後ふ七ー一軒の家あり此家へ入りて何ゆゑ唱きゝふ至と見えて立出先此方へ入ゑへとゝふ入りて見るふ酒飯を高ふ家なり年い年の頃三十余ゑて色黒く脊高く逞しき男ゑて月代を延し居ゝ頭て駕屋湯を汲来りて足を洗ふ扶して奥へ通し主ふ様此辺い宿場ふあらざれば何でも不自由なれども心置なく休ゑとゝて先膳ゑ人前持来まば駕屋も我々も今宵い爰ふ泊

木津右門
妻籠の山中ふ妻手の爲ふ苦しむ面
右門うえん
右門妻のつぼね

鬼蔵きぞう
於富おとと

明日又飯田迄参べしとうひて此家にて食事抔する
右門夫婦い昼より乃を急ぎて労きる事なれば食事前ふ
先一盃呑べしとき酒あらば玉へと云主人吟て与紀酒をの
ぞき玉へ我方ふ別ふ貯へあく酒あり夫を進すべし夏代りふ
價此高し右門價い何程ぞも苦しうしじとうふ主ぶぐく出
し来る事あれば度々行も六ケ敷又其度毎ふ待玉いんも悪
々れば入用程一度ふ出し来べしと云故然らば我計ぞもあら
ざれば二升ばかりも出し来べしとうふ主賓客ふい大ふの大酒
なりとひて裏へ行頃て酒を持来り出しくれば右門夫婦
是を飲ふ成ども道中へ出て是ぞの酒い今迄呑ば僕ふも呑

べしと云て呑ぜ於富ふも呑しの呑ざるやとのふ娘い兩親の酒を
好むを楽ば道中ふい誘子などりつる盗賊もあらば吟しふぜる
夏もあれば余りふくい慎を玉へとのへ兵聞入ざれば是ぞ我身なりと
心付べしと思ふ故一滴もの呑ざるやと云ふ我
ふい常々呑付る悪酒ば口ふ合て玉へと厨ふて別の酒を呑て更
ふ呑ば右門夫婦と僕と三人ふて二升ばかりの酒を少も残さず
呑り於富敏早食支を仕玉へとのふ三人共目を見詰て物を
云ばいい何とも仕玉ひしと父母を抱て更ふ物のふとの
なりば様子ふて涎を流し五躰も叶ぬ有さまふて三人共其
所へ倒れり於富ハ途方ふくれ前へ廻り後へまわり様々狼唄

居る主人ハ此様子をぢつと見居らしがさふ騒がれふ是ハ人ふり不
き気の強き良酒を多く呑まさるる故強く酔まさるる酔さむ
まバ治るなり少女ゆい先此方へ来玉へと手をとるをイヤく妾ハ
爰ゆて分抱すべ〳〵外へ行車やあると動ぐざるを主情強たゆ
を云少女ゆるゆと無理ふ手を採引るを於とゝい行ぢと爭
へバ否でも應でも連て行ぶゝと置べきと引抱へて連行んと
する此時以前の駕屋両人出来り頭ちあと一人で初りのと
賞歎しやうとい胴欲でい有まつるふ何を云ある我樂を
〳〵其跡でい汝ふも代るく相伴ひ先丈迚一盃呑で待て
居らと於富を小脇ふ引抱へ裏手の方へぞ出るる於富ハ爰

を動ぐと思へバ行ずと爭へ共彼ハ壯んの大の男此方ハか
よわ〳〵少女あるまバ鷹ふ取られし小鳥のごく引ぞられぞ行
るりける此りのを何者と思ひ見るふ此所ゆて酒と商ハ旅人ふ
右ひ呑ぐ手りとへて酒と呑〳〵金子衣類など剥取殺害ふし又ふ
時ハ衢道へ出て引剥とあ〳〵抑する雞の鬼藏とゆる盗賊たり
又駕屋ハ此者の手下ゆて馬籠の牛妻籠の六とゆる者たり鬼藏
ハ於富を引立表へ出小バ山の根方ゆ木立生茂りゆる間ふ一軒の家ゆ
見へつる行鬼藏我心ふ從ぐ助ん否とゆぐ殺んとゆぐ於富ゆ
ゆべき殺ぐ〳〵ろ已ふ身ハ汚ぢ父ゆる母ゆるも已ぶ酒ふ毒なと入
〳〵物ゆん〳〵と罵ぎバ地も此奴素手でい行ぢ雞の鬼藏ぶ見入ゆる

あれ只八通さん否でも應でも捕て寐ると手込ハ　なるべく富八
アレヨくと呼立ル迄ハ遠き一ツ家の答る者いあらし　吹雨風
の音　颯々と吹ル木霄く　計たり鬼藏ハ於富が両手を縛り
思ひのまゝ不慰んでさらば是ゟ表の奴共料理して呉んと法
居る於富を其侭捨置表へ出て門口を外ゟ鎖て出行ゟ
二人の者ハ家前より酒肴喰て居ゟ家ゟ能時ゟたり頭と
呼んで左付て仕舞んと立上りさる其所へ鬼藏出來り時刻ハ
能ぞ彼奴ホゞ懐さゞ見ると三人ゞ懐中ゟ畏肝財布ゞ
取出し荷物も残らず引出し衣服も取て丸裸ゝ成し右門ゞ
大小腰不帯裏の方へ引出し已ゞ刃て成佛ゝと一々不留め

とゞ死骸を空井戸へ投込で上ゟ土をうけさうそる於富鬼
藏ゞ出行し跡不法況と居ゞ丞ゞ父人母人いゝ不任ゝ
しやらんと身をあがきあせる拍子ゝ縒らるたる縄の解しゝ
直不表へ出んと已不外ゟ鍵をうけてあり如何不なきと思ひ
ゞ潮の事あてゝゞ明表の方へ行ゞ今父母不留ゝ
井戸へ打込所ゝ此体見るゟ狂気のゝく鬼藏ゞ腰の脇差
引抜親の敵覚斯ゝと切て加ると身を晋し持る刀を打
落て高手小手不縛り上ゝるも俱ホ其井戸へ入ゝを妻籠の
六ゞ押留め是を殺すハ惜きものゝ何方へ賣てゝるゝ
ゝと金不ゝる代物なりと云へハ鬼藏ゞ賣てゝ

ゆもなるべきぶ〻ん日の様子を口走る時ゆへ我ぶ身の上僅の代物舎て肝心の九手失ふたら何とする頭の云々事たれどそう畏うてい金設ふかならぬなり東の果でも西の果でも遠ひ所へ賣てゆりなば口外でも浮雲なり何とそらみや途中の口留なるべきうと爭ひの止ざれば馬籠の牛ぶ傍ゝり其評定ハ明日ゆして今夜ハ兼て約束の飯田の五場へ行ねばなる鬼藏忘きり今ゝ行ていと遅うんうと云べきぶ四ツ前なん今ゝ行ても夜半ゆへ行なり何の遅き事やあるゝ故於富とび縊りる侭以前の裏の家へ連行是へ入置外ゝり破と鎖ー以前ゆまりて忍より明ざる様ゆ除しきらば明日帰りを賣てやりなと殺ーて

仕舞なりとナべーと三人打連出行ゝり於富ハ内ゆ只一人此度ハ荒縄ゆて縊らき動く事さへあらばして悲ーさこそ苦ーさゆ心のうちゆ思ゝのやう父母をび殺さゆて此身をび恥ゝめらき何とて此世ゆなぶべらるべき今の時父上母上と一所ゆこそーて呉ゝるなら此思ひハ有間敷ゆ何の因果で此身一人此苦さへなる事ぞ死ぬ子さへもならぬる縄月のゆりてよるんと思ひ流此と必ゆ思案なり譬へ体ハかるるぶとも舌を喰切死ば死えと覺期極ていゆ中を恐ゝる事ハ中ゝと思ひ念仏数遍とるへ居ゝが去ゆても口惜き次第なり迚も死ずべき此身なれどせめて敵を一太刀ゝりと恨ー上ゆて死るなら本望なんゆあめく爰ゆ死るとハ

言葉なき事なりと口惜泪ふ呉居る折しも入口の戸を叩る
音しなれば出へ帰り来りと喜ばれ又此上ふいろまうの目
ふらあるすらん其時ふ至りあば舌喰切て死ぬべき為ん
様をこを見めと見る弱極めて居るうれば頼を戸を押明をり
来りしい鬼蔵なるで妻義の六あり於富ば傍ふ居寄て云ゆう
我你の事を思ふ故二人を背て帰来まり寂前鬼蔵ばるるん
も殺さんと云うりを我さるぐふ言うるあてあの座へ潮延しうり
明日帰り来りなば殺すべし你我心ふ従ひるば今宵のうちふ
連て退き你の命を助くべ我心ふ従ふまでなやとのふ富心ふ
思ふ様ふやり何をう云ぬん大ゆるぐらいるあ色して欺き此処をのれ

出此五地の代官所へ行へを根をを返すべしと云ふ伏
定し命さへ助けて玉へと你の心ふ従あべしとうべ六ひよ
大ふ遠ひなるやとりふ何ふ偽りを云べきそとりふふとらば一刻も
早く立退べしと於富ば縄を解鬼蔵ば貯へ置し金を引
へて懐中しばれん行ん此少女歩行せ行ていい埒あじと思ひ
空駕を荷ひ於富の手を取り五六町も行て或家へ入て金子
を与へて人を頼こ於富を駕ふ乗せ已き庄棒ふきて女ふ和
る車なるば近道を行て福嶋へ出夜も更し車故其夜ふ
福嶋の己ば知る宿屋をおとし是ふ泊り翌日塩尻とうる
迫行て宿りしふ於富中々心ふ従ふ顔色いたくやく共ふ

処出んとなす故妻籠の六ものとあり居る所へ折ふし其宿屋へ鎌倉より京へ藝者を抱へふ行し子供屋の亭主泊り合し居さりしが是ふ應對にて賣渡しる故直ちに連ちり仲町へ出ヒしふ於富如何ふもして父母の仇を討さき念願ひ赤間源左エ門い俠客なりと聞て此事を語りしふ心安く受合しるぐ終ふ赤間ふ伴なわれしなり藤八此物ぐりを聞て我商人の分なれば助太カいならざれども信濃飯田の藩中ふい我得意多く懇意なる者もあれば仇を伴ひ行其由と物語り有司の手を借り敵を取り得さとんとふ故終ふ又藤八ふ身を任ヒられ兵是も又於富を手ふ入んが為の詞にて其後いなむ出ざりそう

第十一回

怒薄情槃三爲刺富女
婦人薄命而愁破身操

康直ふ獵師い山を見ぐと已ぐ心丈敬ちる所不有時い前後ふ心付ぬりのくされば与三郎王子ふ於て於富を見ち心得ぐ思あり故ふ跡を付行しふ源氏棚なる所へ入しり亀角ふ類惑解ざ近辺なる酒店ふて様子を尋しふ弥於富ふ遠ひなる様子なれども若早まりて人違ひの時い後日ふ言訳ぐとなる必を抑ちるべ其夜い己ぐ家へなり寝るとい兵寝付ぬぐ明日ハ改聞定りつゝ古富ふ相違なくば只やい五ん之憤り胸ふ満休ちる翌日起て源氏棚近辺へ行て尋れしふ委しく知さる

与三郎於富に再會して源氏棚を立退圖
於富長兵衛妻
藤八

於富

者ありて物語を聞ずに更津の赤間源左エ門とのへる者の妻
なる由とのひられが我斯る姿となりて一生を誤ちしも彼ゆ誰う
ぞ故なり此侭ゆ捨置なば我のみならず又人をも欺き多く
の者の笑ひとならんと思案して更より我家へ帰り
一力を用意し源氏棚なる於富が富が丸の前へ往て窺ふ家
早くゆ於富が居るやら定ならねば音とも
様ゆ切戸を明け内ゆ入てゆ差ゆ丹び様子を見るゆ障子ゆ
寫る於富が影法師外ゆ誰も居ぬ様子故折ことよりれと
障子引明飛入て不実の女め覚期とと扱うちゆ切行必
於富が胸り飛のきて赤間が知つて來りしと迯んとせーば

目を止めて是を見らゆ源左エ門ゆいあらず何者なるゆやと問へ
ば相貌替りて其上ゆ昔ゆ異なる出立なれば与三郎ゆ
心も付ず身ゆ覺えなき不実呼りとも仮い何人なるやと
問へば薄情女ゆ誰なるぞ悪名受し其上ゆ数ケ所の手疵ゆ
此如く相貌変て已まで我面躰ゆ見違る共必ゆ覺えあん
与三郎を見忘れーら覚期なるを飛うとを偽りゆあらし
衝立を小搦ゆ取て身を囲ひるる云ねば声音とゆも覺へ相
形変る共其人体い変らねば何条仇を見忘れべき去るぐ
赤間が為ゆ切害されし此世ゆ在さぬ人なりと海松杭がひらる
故ゆ思ひーゆ知りて能も存命ありーるも仇の為の

仇なりとて妻を討んとの事ならば討まゐらせも苦しからぬ事なれ
我身の上も物語り伺の様子も聞しに上意も角も心次第
不申玉へ少時の猶豫を乞てさんぬと衛を押やり与三郎が
刃の下ゆ押直さんび杖の下より廻る子の叩きを難しと世の譬
流石おとりし与三郎も討ふるふ振り於富は屹と居
直りて先我身の上より物語やべいるぞや木更津迄て二人
が密通顕つまし時伺を裏口より落し参らせし故引寄
て表を明んと急ぎ燈し火吹消て火と打付て問取る内表の
門口押破り入来りしが扨ハテ那方と思ひしゆへ我身も
逃んと思ひしが裏へ出なば跡追し時伺の為ゆ恐ふんと

表の方へ逃出しゆ跡より海松杭追へ来て既ふとへらべり
しを漸ゆて水中へ飛入りしが其後のまい知らざりしゆ如此々
の訳ゆて助けられより海松杭追へ来り時伺い既ゆ捕へらまと
雷早殺さまと玉ひしと云し故此身一人存命て伺ゆ対し
義理立ぶと思へ共助し人が放さざ死も申らず此通食へ
伴ふ内ゆ伺ゆも物語りし父母の敵斯々なりて取て得
さんと思へ我妻なりといらば討らひがしとゆ故敵と討
し其後い伺の為ゆ死んもと費期極めて身を任せり伺い
又いはして此世ゆ存命おるやと問へば与三郎我も其時裏
口より逃出んとせしゆ裏口ゆ待伏の者おりて出んと去

たゞ其所を不意を討まを前轉〻と折重りて押へられし故
やもゝと搖とりくり夫ゝ後へ躍〻して殺しもやぶ性しもやら
ぶ苦痛ふ堪ず半い知りて半いちらよ半死半生ろり所海李
抗ゞ帰り来て其方を捕へ得ごりをゝ〻ゝり我此と長持の
中へ入鯉屋ゞ方へ連れ行て三百両の金ととり此身を鯉屋へ
渡ゝ〻ゝゞ伊豆屋の方へ引取て疵養生ろ臣故命計りい
助りされと此身の不義ゝり疵を変此如くの姿と成れば父
母ゆも言訳なく出奔ねて今の身の上其方い死ゝ〻と思ふ
昨日王子で見ゞ故後を付來りて様子をきくふゝ〻其方ふ
違ひなゝゞ紙々君ゆふ木更津でも我身のを搖とゝり生を殺

しゝ如さのうまれ斯る姿と迄ふ其方いゝゝ迄延を呆
躍ふらゝ不人情ゝゝゞ其仇置ごきと今日の時義ふ及ぶゝ
と一部始終を物語まゞ左様云ゝて有る丸ふ妻を不貞淫婦
と思ひ王ゆも理なり云ゞき事も云尽しゝり聞ごゝるも聞れ
ば今い体の心の仇兎も角も仕ゝと身を惜まゞる健気ふ子
三郎も眼も晴生始終をゝく聞い其方も余義ゝ子細
今更何をゝ恨ゞき左あんふ此家の藤八とゆん体の為ふ力
ゝゝり歌を討さん心なゝと問まて於富い泪をゝゝ其ゝふ
待ゝゝり我身の為宿世ゝて歌の為身を殺され父母い非業の
死をゝゞ憂川仁の身とゝりて心ふ深ゝゞ二親の歌を討て得さ

せんと頼母敷詞を欺うれ赤間が妻となり身を活く通俗と
なりぬそ良縁糸ぞと悦びしも不義密通の名のがれず憂
目を受し其上不死出も互ひに別き〳〵ふ世を送り
いかゞもして垂乳根の敵を討得し其上にて兎も角もなりなん
とおりふ心の願ひなり又いや今の男ふ欺き心深き縁をむ
すびよく聞バ始め妻ふ云ひしに定まる妻にあらじと云も偽ふ
て囲き者よ妾よと人の口ふ落しあらん本妻の為ふ恨らき
頼しなん文なりて実なき心と知りそれ片時連添心なく別
きんと思へど放ちもやらず斯てはいかゞ本意と遂じ今宵
你ふ迫り逢しふ妾が為ふ地獄て佛何とぞ美を連てのが

敵を討しかゞ其大恩ふ死とも忘じ聞うけ五へとりた
口説が云るゝ如きの不信の男なるとも義理をもて金なり
いかゞも此家を連て退きカを添て敵ふ討さん我も昔の与三郎な
らず切られの与三と異名をとり人ふ嫌ひき疎き少を喧嘩とのゝ
人より先へいかでも乗出す向ふ疑ふ出しかゞ跡ふ引じ少も早く
用意せんと与三郎が詞ふ富ふ悦び聲へ此身の物なり共此家の
内なら塵一ツ持て出んも心悪しかゞ其方の
如く潔きを心よろれ僅の物ふ目をかけるな取べき時ふ又取べ
裾引上て早〳〵と出きを詞ふ於富ふ其侠帯〆直して立出ん
とする折柄厳前より門口ふ窺ひ居る藤八が盗人待てと声

うけて与三郎が組付と身を沈んぞうづき投ふ後の方へ投付ら
れお富ハ此間ふ行燈のもり火フット吹消しとり藤八ハ投付ら
れ蠍く内ふ与三郎さぞり寄てお富が手をとり出行を此家の下女
ハ房吊より來り女ゑて小力のある者あるが使ふ出帰り來り表
ゑて藤八が盗人と云しと聞て扨ハ盗賊の入るとと思ひ我生ぞり
ふしと襄義貫んとさぞり寄て与三郎が帯ぞい取て引戻すを腰
をあつとゆり拂ふ此間ふ藤八起上てさぞり乍於富が袖を捕
へんとする故お富先手ゑて拂ひれば藤八ハ目先と拂れるゆ
付拍子ふ下女ふ行當つり下女ハ盗人と心得藤八ふ組付ば藤八
ハ与三郎と思ひ両人捻あふさぞふ藤八ハ云ちを云れウシト

云て下ふ居を下女ハ上より乗うり大音声ゑて盗人とと〳〵へうり出合
〳〵と呼ゆうり此間ふ与三郎ハ於富が手をとり落行うり

第十二回

小吏誣罪人流刑　波嶋教光明断即座分邪正

扨其折柄盗賊悪黨の族を捕ゆる監司の下吏ふ幸野方藏麻毛手
理金太とのゆる者此処と通りかゝる下女が呼ゆる声ゑ聞入來り供ふ
召連ゆる僕の提灯ゑて見ゆふ下女が藤八を押へ居ゆり下女ハ此提
灯ゑて藤八を見て驚き引ゆゆゑて今抱ゆるうち近辺の人も
出來り様子と尋ゆふ藤八ハ兼て方藏理金太と知る人ゆれば委細
の様子と物語りしゆべ丈其者と追ゆけ召捕と下知ふ從ひ徒乃

僕直様跡を追行とり近辺の者共も倶ふ踊とり追行バ理
金太万蔵ももぐ不追行とり与三郎ハお富の手をとり十丁
計りも落行たるふ踊とり大勢の人音して幸野庵毛手ぐ僕
両人盗人待と声ゝて十手ぬ方より取方ぬ与三郎ハ
於富と後ふ囲ひ恥ふ人違ひたらんと云ヒもあへぬ人遠
ふ過言なり尋常ふ縄うまとと十手ぬて取て来るを身と捻ぬ
虚空を打ぬ振返て一度ふ組付を右と左へ投付とり此ふ理
金太万蔵馳付手向ひ致ず不届奴御詮たるぞと云るうち
十手ぬて打居ぬ与三郎ハ御詮とりふ畏て猶予中ふ已前
の僕も起上りてぬ打居て終ふ縄をぞうとり久ふお富ハ

婦女子の事なれば腰縄ぬて倶ふ引立頓て陣司の廳へ連行
入牢とゝ成ける二人ぬ薄命一哀ぬべし其後両人を引出し吟味
ある処与三郎ハ兼てお富と言聟ぬ居る処其後互ふ行方を知
らぬ故ふ源氏棚なる内ふ居ぬ故連退くとの兵衛永藤八ぬ妻
と云ものなく勿論藤八ふ對へなく誘引出せしハ後閣さ業ふハ
きぬ富度々藤八ふ暇を乞とのぬ兵出さぬ内ふ對ふ兵衛引致ず
まぬと存ぬ斯汁らぬ趣きを申富ぬ申様も右の通り乗子三
郎ふ別き互ふ生死を知ぬ為ふ八ふ欺れて身と任すと云ぬも妻有者なれぬ
始ふ身ぬ任ぬ是ハ藤八ぬ偽りて妾を慰ぬ物とり故ふ其後暇と
乞とハ兵免さぬ折柄与三郎ふ出會ぬ故倶々ふ立退ぬ趣を申

さるゝ与三郎ハ藤八方ゟ居る者と連出し科有とのゝ兵格別の罪
科ゟも非ず富も出奔の罪有とのゝ兵藤八欺て妾とし其上暇と
ちとのつて出さゞる故ゟゝゞ猶以て罪ゟしさゝ兵藤八ゞ理金太万蔵ゟ
ゟ賄賂を以て与三郎を罪ゟ落さん事と頼を理金太万蔵も与三郎
ゞ相貌変るとのゝ兵伊豆屋与三郎ゟゝゞ昔の意恨と根ゟ以て
藤八方ゟ居る者と誘引出し段々引たり其上平日博奕と
業し喧嘩口論致す段無頼の悪黨なり迚流罪ゟ定まり
伊豆の大嶋へ流人ゟゞ成ゟる於富ハ与三郎ゟ誘引出さゝ段
不埒たりとのつても婦女の事ゟり外ゟ罪ゟるゝゞ御免有て藤八
方へ引渡さゟ定まり然ゟ金神の久次とのる者ゟ弱犯と

助け強きを折くの侠客ゟし此一条を聞監司の聽へ願ひ出
ゟゝゟ某富ゞ身寄の者ゟゝ富出牢致しいゞ御引渡下しゝゟゝ
き趣願出ゟり方蔵理金太是を聞身ゟりゟ者これゟ由を申し出ゟ
ゟゟ者やと有し時久次ハ富未幼年の折双方の親共成人の後要
合すつき契約致し置ハ処其後互ゟ両親死去ゟし在所も要りハ故
通路も絶て打過ハ然ゟゟ此度富入牢ゟ対在所も相知ハ故此ゟ
訴詔ゟ及び御引渡の程を願ゟ由ゟり理金太ゟ申す様甚方
言号ゟの夫ゟも已ゟ富ハ和泉屋藤八とのる者の妻とゟり居て
不埒の筋有之ゟ依て入牢申付ハ処藤八願ひゟ仍て罪一等を即
免有て藤八へ引渡しゟ定まりゟれゞ其方言号ゟとの人共

大川彦の
明斷真偽
を分ける圖
藤八
於富

教光のうち
久次きうぢ

相叶ざるの趣ふ依て久次詮方なく其廉い下し遣し文より大川越州奏へ右の如き訴訟ふ及び御慈悲を以拙者へ御引渡しの程を願ふ由なり越州奏より先ずの監司方へ右の趣申遣られ子細を尋ねらるふ依て監司其掛りなる方義理金太ふ委細の様子を尋ひらる処富ハ富夫藤八願ひふ依て引渡す処なく言号なり迚一旦藤八方へ縁付し者今更左様の義ハ相なぐぶる由を申す故右の由大川奏へ返答ありなれば越前守久次ふ右の次第を申し聞られふ久次申様友八妻と定まりたれ共此訴訟ふ及ぶずと云ども藤八説て富を欺き妻を盗職をなしと云共暇を出さず是ふ依て此訴訟ふ及ぶ由をやるべ又々監司方へ右の趣申し遣らるる理金太万蔵の両人を召寄られ糺さる処其申す処ふ明

ならざるふ依て藤八并ふ富を召寄られ委細の義富ふ相尋らる処始より丞一ふ言上なく然るふ於ては与三郎が刑もなき富らぶと云共藤八方ふ居る富を對へなく連出し不埒なり其上平日博奕を事となすとの不流罪ふ極しい無據処なると又藤八ふ向ひ仰おるる其方富い妻ふあらず其上兼て暇を乞由何故暇を出さざるやと御尋の時彼い木更津ふて入水の節助け恩義あり其節身寄の者なる由を申ふ依て不便ふ存じ引取申いなれば暇を乞とも兵一應申ては出さず久次とやら言号なると申せども肝心の富も存ぜず證跡なき義なれば何ぞ謀計有んも知らぬ尤なれば富ぶ身の上いろやうふ成行んも計られず不便ふ存じ押て願ひ奉ると申故又久次ふ富義も存ぜざる由なるぶ弥

言号ふ相違のきやと御尋の処いかゝ富幼かの時分親共言号いさ
いふ相違なきを兵先日も申上い通藤八妻と定りい者なれば詮方
なし富を欺いて妾と成し暇と乞を出さず依て富を不便不存い故引取
き〳〵度申〳〵双方互ひに争て止ざれば當人の望ふ任すべしと富のゝ母へ
引渡すべきや御尋の処富い久次と知らず斯る因果なる我身なれば久
次方へ行て久次の様の心底やう知まじと思ひしゝ只君の御明察を以
妾が身の立行い様御計ひ願ひ奉る由申上ば大川候やく思案在て
双方の争ひ我いうんとも決断仕難し富ふ尋れば其身の立行様斗
らひ呉うと申是ふ依て富を中へ立て藤八久次両人ゆて富が腕を
持引合見るべし勝る方へ引渡すべしとぞ仰る爰ふ於て藤八久次

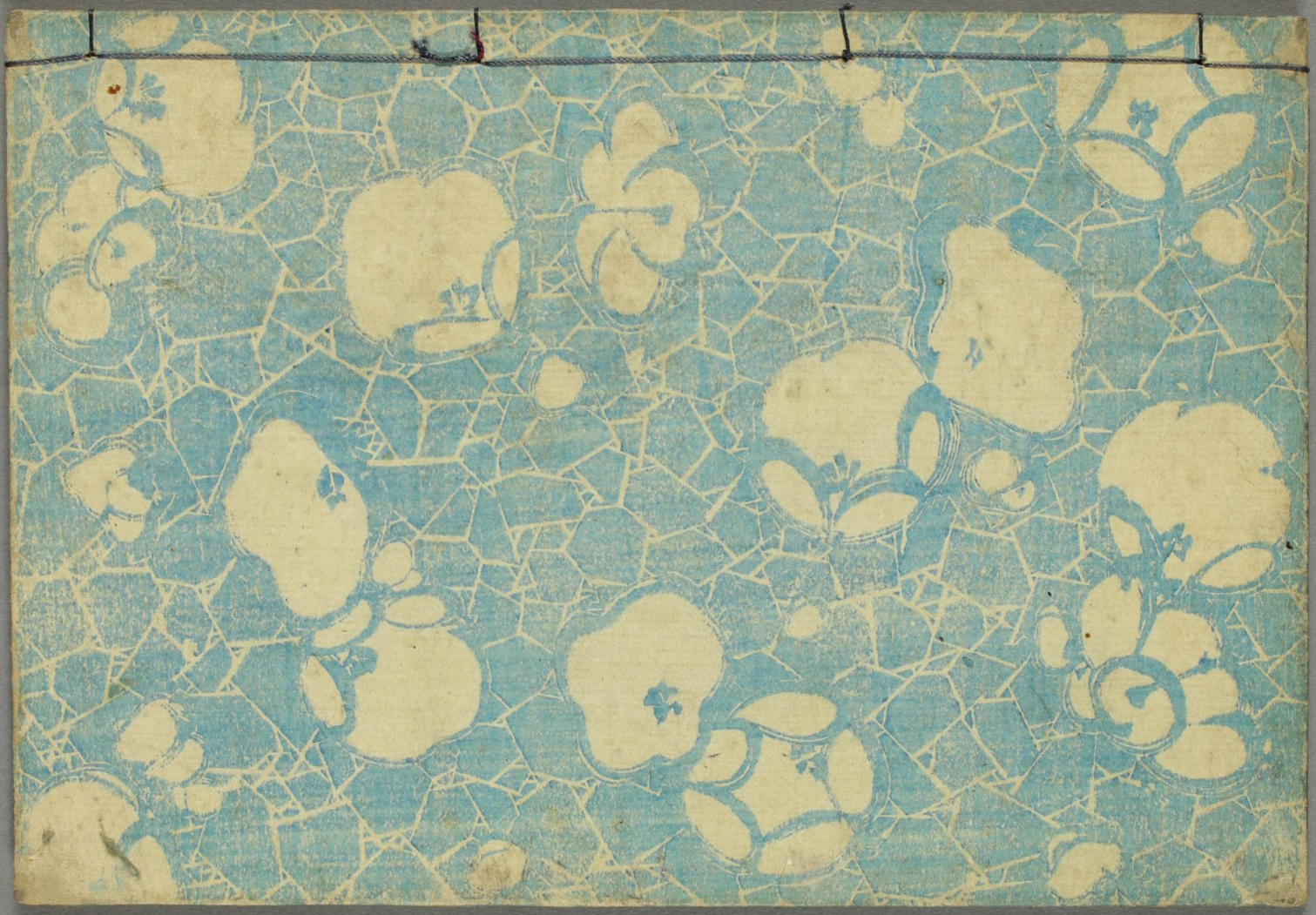
藤八両人一て双方より富が腕を持て引合一処藤八へ変ぞ大なる
若引負なば肝心の玉を久次ふ取られて仕廻ふなり迚も心の腐りしなられ
い引取て貴渡一方金ふふさんと思ひしを久次ふ取きてへ
一身の力を出一引しゝば藤八方へ引勝こり藤八ハ誇顔ふ久次
と成目ふなり正直の頭ふ神宿ると我非力なりと久兵引勝こり
らば富を引取糸ゝ来るべしと富を引立行んとする大川候待
と声かけ玉ひ藤八を嗤と白眼横道者ゆ富が身の上不便ふ存ず
引取度由と申ども已ま い欲と色と二ふ迷ひて富を引取んと申者
なり久次又ちらふ言号なるや然ざるや其真偽ハ知らざれ兵実ふ富
と不便ふ存ず引取んと申者こ故ふ双方より富が腕を持引合一時富が

若痛と見て誤り有てなと存ー故ら富ゞ為ゑ久次底意あり
仍て富ゝ久次ハ引渡ー老手藤八ハ富と妻ゑ[illegible]望と叶へ得ざるなと
欺きて己が心不従ゞ也奉[illegible]て慰ゝ暇をとゝあと必兵免さず非義非
道の討ひ屹と曲事申付べきゝ必兵一旦水死を助けー恵あるとゝ以て罪一
等と免ー老手過怠とて源氏棚なる家財残らず富オキ氏其旨屹と
心得へーと申渡ゝ孔ゑ藤八ハ素不相違ー恐入て下りゝれが久次家富
ハ大川侯の郎智明断と感心して有難き旨御礼申引下りゝり理金太
万蔵の両人ハ藤八と目と目と見合ー底意味悪く御前を退きゝり
久治りて斯於富ゞ事と委敷知りて引取ーゝゝ後輯不詳あり

延世義談　大川仁政録第三輯巻之五　大尾

繡像復讐石見英雄録　全部五十冊

南海　玉藻　主人　編輯
浪花　鶯亭歌川芳梅　画

○初編　永昇人作　○二編　玉藻主人嗣著　○三編　泉場子嗣著　○第四輯以下作者一家
永録モ正の国流茅名嶋の勇士岩見重太郎橘経季が生さちより武者修行
セー川の武功大蛇の害を除き老鯉の妖を殺め渡る天の橋立ゆく
廣瀬成淵大川ホ三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴ー絶小室町殿ハ奉仕て任官
ー給ホ王水ホ[illegible]義望れる[illegible]問ま言堅峯豪傑の義邪婦岩瀑孝女新月ホ[illegible]
給ー[illegible]五雄と称せる勇士の列僧霊猿怪魚の怪談ホ五輯より益入佳境新話多り

南久寶寺町心齋橋北エ入
前川善兵衛藏